雰囲気照明手法の研究

システム科学技術学部
建築環境システム学科　２年　伊藤　達也
２年　橋本　力
指導教員　教　授　松本真一
准教授　長谷川兼一
助　教　源城かほり

目的　今回私たちは、商店建築でその店の視覚的側面から非常に重要な「雰囲気照明」について、実際に視察に赴き、研究をすることとする。

視察１．カンパーナ（秋田県秋田市）

スパゲッティ専門店。

外観は淡いピンクを主体とする明るくも主張しすぎないよう配慮。外の照明も派手ではなく、看板・入り口のみを照らし、無理に光をとり入れるといった様子は見受けられない。内観については、まずは「明るい・統一感がある」と感じた。インテリアは「イタリア」を連想させるものを置き、雰囲気を壊さないようにあまり金属系を置かないように配慮しているように見えた。窓は入り口付近の１つしかなく、大きさや位置から光取りの窓でないことが予想され、同時に、店内の明かりは完全に照明に頼っている。天井の照明は一般的な昼白色の電球のみで構成され、配置はランダムで規則性は見当たらない。ただ店全体に配置され、どこでも同じ明るさを保っている。厨房は反射するものが多くあり、客席より幾分明るく見え、これにより清潔感と透明感を生んでいるのではないだろうか。壁に付けてある照明は飾りのようなもので、照明的な意図はあまり見当たらないと考えられる。

特別こだわった照明はないが、明るめに照明をとることにより、清潔・活発的なイメージを与え、イタリアを連想させるインテリアがそれを引き立てていた。シンプルな構成もそれと連結し、統一性も感じることができる。

見学１．ENDO ショールーム（東京都外苑前）

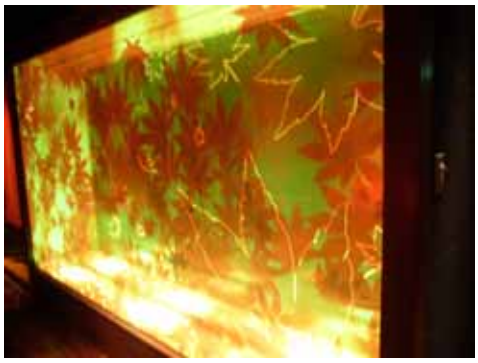
ショールームに赴く事で照明の種類や手法を学ぶこととした。そこで多くの照明器具を扱っている ENDO ショールームに見学へ向かった。

展示内容は照明と家具とを合わせた演出。体験エリアでは光 BOX を設け、光源や強さの違いによる演出効果や色温度の違いにより、照明を使った心理効果などを直接体験できる。また、照明の切り替えによる見え方の違いの体験や、展示ブースでは数百もの照明器具を展示、シミュレーションホールでは企業の人たちとの打ち合わせが行われている。家具は有名なデザイナーのものが多数あり、それに対して主張しすぎることなく照明が配置されていた。

多くの照明や手法を見ることによって、知識の習得と、実際に照明に触れることによって自分のデザインへの提案の幅を広げることができた。

視察２．和乃個室 紅葉時雨（東京都中央区銀座）

「晩秋の紅葉」をイメージした紅葉時雨は、一歩店内に足を踏み入れるとまさに紅葉の世界。訪れる人々から大きな注目を受ける高さ３メートルの紅葉の木はスポットライトを下から浴びて鮮やかにそびえ立っている。銀座の中心街にある飲食店として、主に接待等で女性が多く利用されているようである。個室は「銀杏の間」、「楓の間」など江戸情緒の雰囲気が漂う全１６室で構成され、中でも人気の個室「紅葉の間」は高床式の個室でガラス張りの床下に石がひかれ、紅葉が散りばめられた状態で木と共にライトアップされている。それに対比するように各個室間を繋ぐ石の廊下等は暗く、落ち着いた雰囲気を与えるように照度を落とすことで更に紅葉の木を強調させている。階段を上ると LED ライトを用いた大きな紅葉の映像が映る壁や火・雪・水・風・光の中に舞い落ちる紅葉が個室ごとに異なるグラフィックを用いて表現されていて、幻想的な空間になっている。



視察３．日月火　ZOE 銀座（東京都中央区銀座）

200 坪・天井高約５メートルのゆったりとした空間に「和のリゾート」を目標とした、板前料理店 日月火は店内の中心に池を配置し､その真上に座敷席を設けることで現代的な川床を表現した。池を中心とすることでカウンター席、テラス席、茶室等店内の空間に対して水面の反射や緑からの鮮やかな眺めを得ながら料理を味わうことができる。店内は比較的暗く、モダンな雰囲気を演出しているが、テラス席付近や個室では外壁に四方竹を配置し、その下からスポットライトで強く照らすことで外壁と天井に映る四方竹の影を模様のように演出させることで美しい和のイメージを獲得している。和とモダン、それぞれの特色を照明によって巧く融合させた店内では五感で涼を味わうことができる。

視察４．六雁（東京都銀座）

ブランド街の中にひっそりと構えている日本料理店。だが、他の日本料理店とは多くの違いが見える。それは店へのアプローチから現れている。他の店が「我こそが」と大きく、かつ、華やかに彩られているのに対し、ここはまさにシンプルである。知る人から知る人へ。そんな人との繋がりを大切にしているようにも見える。

店内の照明は全体的に落としており、静かな雰囲気を演出している。モダンな作りと簡単にまとめてしまうのは安易なほど個々のこだわりが見える。六雁のメインともいえるオープン厨房は直接カウンター席から見えることから、他の場所より照明を強くし、透明感と清潔感を出しているように見えた。各個室などにおいては来店した人や用途により照明を明るく又は暗くするといった工夫と気配りをしている。また、６Ｆの個室の吹き抜けは、

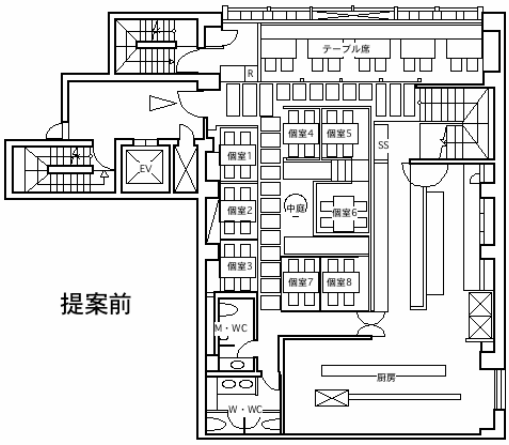
外からの光が柔らかく入ってくるように天井が工夫されているのが見て取れた。内装はオーナー本人の希望から何度も練り直し、美意識の統一と、来店した人とのコミュニュケーションを通して「人と人との結びつき」の中で決定していったという。BGM は特別きめておらず、「職人の調理する音が BGM」という人間味のあるものとしている。
以上を含めてみると、照明自体は特別にこだわったわけではない。しかし、コンセプトを重視し、統一された店内からは不思議と人間味があり、和やかな雰囲気が感じられる。統一と調和。それに人は自然に落ち着くのではないだろうか。

視察５．つぼみ（東京都新宿）

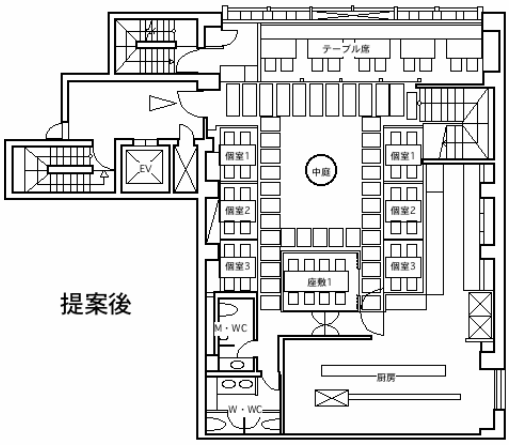
　エントランスでのインパクトは最も強いだろう。エレベーターでのアプローチとなるが開いた瞬間、この店のメインと言える「つぼみ」が現れる。蓮の花をイメージし、本体を直接照らすのではなく表面のみを撫でるように光源が工夫されている。床は草の役割を果たすものが敷かれ、幻想的な雰囲気をだし、見せ場として強調させている。

　店全体の照明は特別明るくも暗くもなく、基本的に必要とする照明のみで構成され、無駄な光源の配置は見られない。だが、カウンター席は若干照明が落とされ、その奥の宴会も可能な「花の回廊」と呼ばれる場所は通り道が照らされ、天井の照明も華やかな装飾が施されている。ただし、客席数の関係だと思われるがその回廊に飛び出している部分がある。こだわるのであればここは奥までストレートに通してもよいのではないだろうか。
　奥に進むことにより状況の変化を楽しむことができる。照明は明るくも個室という空間を大事にすることによることと､つぼみという圧倒的な存在感からこの店独特の幻想的な雰囲気をだし、自然と落ち着いた空間を生み出しているのではないだろうか。
　何か一つの大きなインパクトによって人に与える雰囲気は大きく変わるのである。

考察　　今回視察した中で「紅葉時雨」を自分たちでアレンジしてみることとする。
コンセプトや基本的な構造は維持しつつ、今回の視察で学んだことを生かして私たち独自のアイディアを提案する。



提案前



提案後

特に考慮した点は、ここに来たすべての人がこのお店のシンボルである紅葉の木を観賞できるようにしたことである。視察に訪れた際、テーブル席や２階の座敷席で食事をしようとする人達には紅葉の木が見えづらくなっており、シンボルとしての役割に欠けていたように思える。そこで通路の一部をカットし、お店の中心に木を配置した。池の上にたたずむ紅葉の木は、池の中の光源によって天井にその影を映すとともに、幻想的な雰囲気を演出し、さらにお店のシンボルとして記憶に強く印象づけることが可能である。

座席数は同じ数を維持している。また、人気の個室であった「紅葉の間」を引き継ぐものとして奥の座敷席を設けた。ここも高床式であり、その下には紅葉が散りばめられ、ガラス越しにライトアップされている。

まとめ

今回研究を行ってみて、資料を集めることで自分たちの知識を高めることができた。また、実際に視察をし、直接そこで働いている人に話を聞くことで、新たな価値観を得ることもできた。今後、この成果を生かし建築というものをさらに探っていきたいと思います。

今回の研究を行うにあたり、お世話になった方々、本当にありがとうございました。

参考文献　　商店建築（商店建築社）